

# NHKデジタル教材『伝える極意』を活用した 言語能力の育成

## Development of Language Ability with NHK Digital Teaching Materials “Tsutaeru Gokui”

古谷 成司

千葉大学大学院教育学研究科修士課程

本研究は、NHKデジタル教材『伝える極意』を活用し、必要とする言語能力を育成することをねらいとした授業プログラムを開発し、その成果と課題を考察することを目的とする。PISA 調査や全国学力・学習状況調査により言語能力の低下が問題視されている。そのため、現在、様々な教科学習や教育活動をとおして言語能力を育成することが求められており、「スピーチ」「プレゼンテーション」「パンフレットづくり」など様々な言語活動が展開されている。こうした言語活動を行う際に、オンデマンドでNHKから配信されている『伝える極意』を活用することにより必要となる言語能力を育成することができた。

キーワード：デジタル教材、伝える極意、言語活動、言語能力、国語

### 1. 問題の所在

#### 1.1. PISA 調査の結果がもたらした変化

2004年12月に「OECD 国際学習到達度調査」、通称「PISA」の結果が公表された。この調査はOECD（経済協力開発機構）が、2000年から3年ごとに実施している国際的な学力調査である。この調査では、「読解力」と「数学的リテラシー」、「科学的リテラシー」の3つの学力を測定しているが、より重点的に調査する項目は毎回変えている。

この調査で「読解力」と「数学的リテラシー」の2つにおいて、日本は2000年と比べて2003年に順位を下げた。読解力は2000年に8位（31ヶ国中）だったものが2003年には14位（40ヶ国中）に、数学的リテラシーは2000年に1位（31ヶ国中）だったものが2003年には8位（40ヶ国中）という結果に終わっている<sup>1</sup>。

そもそもトップクラスを走っていた日本が例えば、読解力において参加国中のトップ10に入らないほどに落ち込んでしまったのである。ちょうどその頃は2002年から新しい学習指導要領が学校現場に反映されて、教科書も変わり、「総合的な学習の時間」が始まり、完全週5日制になった時期である。いわゆる「ゆとり教育」といわれているものが実施されたところであった。

こうしたことから、社会の論調が「このPISA調査の結果は『ゆとり教育』のせいだ。」となってしまった。

このPISA調査は、多くの国で義務教育終了段階にあた

る15歳児を対象にそれまで学校や日常の生活場面で学んできたことを、将来、社会生活で直面するであろう様々な課題に活用する力がどの程度身に付いているかを測定することを目的としている。単なる国の順位づけを目指すものでも、それぞれの国の生徒が学校カリキュラムを通して知識を単にどれだけ獲得したかを測定しようとするものでもなく、PISA調査は、「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」といった概念によって、新しい能力・技能を見ようとする試みである<sup>2</sup>。

この調査で測ろうとしているものは、従来、日本の学校現場が測ろうとしてきた「学力」とは異なっている<sup>3</sup>。将来社会生活で直面するであろう様々な課題を解決するために必要となる力を測ろうとしているものと考えられる。

さて、平成19年度から全国の小学6年生と中学3年生を対象に全国学力・学習状況調査が実施されるようになった。国語と算数（数学）の2教科で知識を問う問題（A問題）と知識を活用する問題（B問題）の2種類を行っている。この調査を実施することになった背景には、これまで述べたようにPISA調査により日本の子どもたちの読解力が低下していることがあった<sup>4</sup>。

ここでいう読解力とは、文章を読んでその意味を理解し、解釈する力を指しているわけではない。「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」を指している<sup>5</sup>。こうした読解力は「PISA型における読解力」（以降、PISA型読解力と示す）といわ

れている。

そのため、全国学力・学習状況調査の問題、特に国語(B問題)についてはこれまで子どもたちが解いた経験の少ない問題、PISA型読解力に近い問題が出題されている。

これまで学校教育の中では文章の中に書いてある内容を読み取る問題が出題されることが主であった。例えば、千葉県標準学力検査の説明文や物語文を扱った問題では、「『そこ』が指している言葉は何ですか。」や「主人公が泣いたのはどうしてですか。」といった内容を読み取る設問が多い<sup>6</sup>。

しかし、全国学力・学習状況調査の国語(B問題)では、例えば、ある文章を読み、そこからパンフレットをつくるために必要な情報を抜き出したり、自分の考えを述べたりするといった問題が出されている<sup>7</sup>。

2002年改訂の学習指導要領において、PISA調査における読解力を軽視していたわけではない。平成19年12月の中央教育審議会の答申では、読解力は子どもたちに必要となる力であると学習指導要領で示していたにもかかわらず、十分に身につけていなかったとしている<sup>8</sup>。

そのため、全国一斉の学力調査にPISA型読解力が求められている問題を出題することにより、文部科学省は、日本の子どもたちにこうした力を身につけてほしいというメッセージを出したものと考えられる。

## 1.2. 言語活動の充実

全国学力・学習状況調査の国語(B問題)でみられるようなテキストを読み取り、その内容を元にパンフレットをつくるような言語活動は国語科の授業だけでなく、他教科でも行い、言語能力を培っていかねばならないということが教科学習のなかで求められるようになった。全ての教育活動の中で言語活動の充実を図ることについては、平成23年度から小学校で完全実施される学習指導要領の中でも強調されている<sup>9</sup>。

言語活動は、活動を通して言語の有している機能を具体的に発揮させることであるといえる。言語には、伝達や記録という機能のほかにも、認識、思考、創造等の機能がある。これら言語の有している機能を十分に発揮させるには、全ての教育活動においてより適切に、より効果的に展開する必要がある。

では、教育活動のなかでどのような言語活動が見られるだろうか。国語科でいわれる「話す・聞く」「書く」「読む」活動として教育活動を細かくとらえていくと全ての教育活動において言語活動が行われているといえる。例えば、朝の教室内を見ると子どもたちが一斉に本を読む姿が見られる。これは「朝読書」といわれており全国的に盛んに行われている<sup>10</sup>。また、朝の会に移ると、1分間スピーチがよく行われている。この他にも話し合いやディベートなどの討論を行ったり、作文や感想文、報告文を書いたり、調べたことを発表したりすることも

よく行われている。

このように、社会科や理科、総合的な学習の時間等の授業のなかにおいても様々な言語活動が行われている。しかし、これらの学習において、例えば、スピーチの仕方を学んだり、報告文を書いたりすることに対して言語能力を特に取り出して身につけることは行っていない。

様々な言語活動をしながらその活動に合った言語能力を鍛えることを、主とした目的で行っているのは国語科の学習である。例えば、話す・聞く活動では、5年生においてはディベート、6年生においてはパネルディスカッション。書く活動では、5年生においては放送原稿、6年生においては意見文。読む活動では、5年生においては一人の著者をとりあげて教科書以外の著作の読書、6年生においてはテーマを決め教科書以外の書物の読書。というように各学年の発達段階を考慮しながら、「話す・聞く」能力、「書く」能力、「話す」能力を育成することを目的として様々な言語活動が展開されている<sup>11</sup>。

## 1.3. 言語活動の現状と課題

学校現場では、具体的に言語活動の充実を図るためにどのような学習が展開されているかをみてみよう。

筆者が勤務している千葉県富里市教育委員会では、富里市内小・中学校の平成19年度全国学力・学習調査における知識を活用する問題(B問題)が全国平均を大きく下回ったことから、この原因を探るために分析を行い、報告書を作成した。国語科について授業内容と設問ごとの正答率を分析したところ、国語科の授業において、「言語活動を通じて身につけるべき言語能力の育成が十分になされていなかった。」という結果が示された<sup>12</sup>。

例えば、5年国語の教科書(教育出版)の中に「情報を正確にとらえよう」という単元がある<sup>13</sup>。この単元には、「森を育てる炭作り」(岸本貞吉著)という説明文を読解する学習のあとに「放送原こうを書こう」という学習がある。この単元の学習の進め方については、小5国語教師用指導書(教育出版)において次のように示されている<sup>14</sup>。

### <第一次>

- 1 単元全体の見通しをもつ。
- 2 「森を育てる炭作り」の感想を話し合う。
- 3 文章の内容や構成を読み取る。
- 4 筆者の言いたいことをまとめる。
- 5 てびきを学習する。

### <第二次>

- 1 放送原稿の書き方を理解し、放送計画を立てテーマを決める。
- 2 調べたいことを、資料を基に調べる。
- 3 放送原稿を書く。
- 4 作成した原稿を読み、評価する。

この単元では、説明文「森を育てる炭作り」について読み取った内容を放送原稿にして伝えようというのではなく、放送原稿にする内容は自分でテーマを決めることになっている。また、教科書に放送原稿を書くポイントは示されているものの、「書き出しを工夫しよう。」「初めに要旨をまとめよう。」「事実と意見を区別しよう。」「といったものにとどまっている。そのため、授業の中で子どもたちが放送原稿を書く際にどう書けばよいか困惑する姿が見られる。こうした言語活動に対して、いかに子どもたちが戸惑うことなく行うことができ、言語能力を高めていくかが課題であった<sup>15</sup>。

こうした課題を解消するためのヒントとしたのが東京都台東区立上野小学校の平成19年度に行われた研究である<sup>16</sup>。

上野小学校は、「読解力を育てる指導法の工夫」という研究主題のもと国語科において研究を進めていた。進めるにあたってのポイントとして掲げていたのが、「単元終末のゴールが明確な、活用・探求型の単元構成の工夫や開発」であった。情報の取り出し型ではなく、「何のためのテキスト（文章・本・資料・写真・データなども含む）を読むのか」「読んで何を解決するのか」を子ども自身が明確につかんで学べる現実場面のある単元を開発し、自ら学び、自ら考える探求型の単元の中で、基礎的・基本的な知識・技能を育成する習得型の学習を行う工夫を行っていた。

この研究の中で特筆すべき内容は言語活動に合わせた能力を習得するためのワークシートの開発であると考えられる。

平成19年11月に富里市学力向上研修会を富里市立富里南小学校において開催し、上野小学校の八戸理恵教諭による放送原稿の書き方のポイントを習得する授業を展開した。本授業は、ある説明文の内容を2種類の文章で表したワークシートを用意し、それを活用して、どちらの文章が放送原稿として望ましいか、また、なぜ望ましいかを考えながら、放送原稿の書き方を見つけていくというものであった。子どもたちはこのワークシートを用いて学習することにより、放送原稿はどのように書けばよいかということを理解することができた。こうしたワークシートを用いた学習が言語能力を高める手立ての一つとなりうるようになった。

ワークシート以外に、他の教材を用いて言語能力を高める方法を考えてみよう。

NHK教育テレビの学校放送番組で『伝える極意』がある<sup>17</sup>。本番組は、作家やアナウンサー等の専門家が番組に登場し、言語活動に際して悩みを抱いている主人公に「極意」と称して適切なアドバイスをするといった内容である。ドラマ仕立てで制作されており、言語活動に対する意欲を高めつつ、言語能力を向上させることができるようになってきている。

しかも、本番組はオンタイムで見られない場合もデジ

タル教材としてオンデマンドで配信されているのでインターネットが整っている環境ならばいつでも視聴することが可能である。このことは、本番組を言語能力を高める教材として活用するもう1つの利点となり得ると考えた。先に述べた放送原稿を書くという言語活動で言えば、教師が必要としている時期に必ずしも行われるわけではない。同様に、例えば、朝の会のスピーチを充実させたいと考えスピーチの能力を高める学習を仕組みたいと思っても、その学習が国語科の年間指導計画で取り上げられているのが数ヶ月先というようなことがある。また、昨年度にすでに実施し終わっているといった場合もある。そうすると、本番組を活用することにより、必要な時期に必要な言語能力を育成する学習ができるようにしていくことが可能となる。

このようなことから、言語能力を育成することに効果が期待できる教材と適切な時期に本番組を活用した授業プログラムを作成することが必要であると考え、本研究を進めることとした。

## 2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、必要とする言語活動に合わせ、NHKデジタル教材『伝える極意』を活用して言語能力を育成する授業プランを作成、実践することでその成果と課題を考察し、作成したプランの有効性を明らかにすることである。

### 3. 『伝える極意』を活用した授業づくり

#### 3.1. 『伝える極意』について

NHKデジタル教材『伝える極意』の内容は、「『伝える』ことに挑戦する子どもたちと、それを導く表現の達人たちの姿を通して、様々な伝える手法の特徴や活用方法をわかりやすく紹介します。」としている<sup>18</sup>。

『伝える極意』は、ストーリー仕立てで毎回様々な言語活動に関わる内容が全20回にわたって展開され、各々の回で「自らの考えを伝えるように伝える力」を育むために、文章、話し方、映像などの表現手法の心得、“極意”が紹介されている。

表1: 『伝える極意』番組内容 (2009)

回	タイトル	言語活動
1	ありがとう!の気持ちが伝わるように	お礼状
2	1分間で思いを伝える	スピーチ
3	おどろきのハンドパワー	スピーチ
4	相手の胸に届けるように	朗読
5	ことばのリレー	詩

6	感想がスラスラ書ける	感想文
7	話して聞いて幸せになろう	話し合い
8	その答えに納得!	クイズ
9	ありのままを表現しよう	寸劇
10	聞きたいことを聞き出すために	インタビュー
11	だれが読んでもわかる質問を作ろう!	アンケート
12	限られた文字数で事実を伝える	新聞
13	おもてなし	会食
14	この1枚に思いを込めて	写真
15	ポスターを作ろう!	キャッチコピー
16	物語を作ろう	組写真
17	海のあるふるさと	ビデオ
18	プレゼン資料を作ろう	プレゼンテーション
19	わかりやすいプレゼン	プレゼンテーション
20	わたしのことを知ってください	スピーチ

### 3.2. 『伝える極意』が言語能力育成に優れている理由

授業の中で『伝える極意』を活用することが言語能力育成に優れた効果を発揮できると考える。優れている理由は次の3点である。

(1)教育課程の中で想定される言語活動がほぼ網羅されている。

国語科で話す・聞く能力を新たに掲げた平成14年改訂の学習指導要領が示されてから、教科書にスピーチやインタビュー、新聞記事の作成等様々な言語活動が行われるようになった。平成23年度から完全実施される『小学校学習指導要領解説 国語編』のなかでもこうした言語活動例が示されており、表1の『伝える極意』の全20回の番組内容を見ると、ほぼ網羅されていることがわかる<sup>19</sup>。

したがって、『伝える極意』を活用することにより必要に応じて言語活動に合わせた指導を行うことができるのである。

(2)問題解決学習型に番組内容が構成されている。

番組では、冒頭に小学校高学年の子どもが主人公として登場し、お礼状の書き方やスピーチの仕方に悩む姿が映し出される。そして、そのテーマに沿ったプロが登場し、悩める子どもに極意を伝え、解決に導くという形がとられている。

このように、番組が問題解決学習型のストーリーになっているので、番組を途中で区切りながら主人公の悩みを解決する方法を考えさせたり、番組で行っていることと同様な作業を行わせたりしながら、言語能力を高めることができる。

(3)型が示されている。

どの回においても極意と称して、言語活動を行うときの型が示される。

例えば、第10回「聞きたいことを聞き出すために」では、インタビューをするための4つの極意(①インタビューする相手を調べる・②質問は3つにしばる・③相手を楽しみ気持ちにさせる・④キーワードでメモする)が示されている。宮城県仙台市立松陵西小学校の日野は本回を活用して授業を行った効果を次のように述べている<sup>20</sup>。

「インタビューをして、聞きたいことを聞き出そう!」と伝えたとき、子どもたちからは「えー!」「できるかな…」といった不安な声が上がりました。インタビューゲームで難しさを経験すると、さらに増したようでした。しかし、極意を知ること、番組の子どもたちと同じようにグループで相談しながら1つずつ準備をしていく姿が見られました。

当日、子どもたちからは「1時間なんてあっという間だったね!」という声が聞けました。初めは相手が楽しめるように考えたものが、最終的には子どもたち自身も楽しい時間を過ごす結果になったようです。

ただ闇雲に「インタビューしよう」「読書感想文を書こう」と呼びかけて、話をさせたり書かせたりするのは、松陵西小学校の子どもたちのように困惑してしまうのは当然のことである。適切に型を示して、まずはその型どおりにまねてみるのが重要であると考えます。

斎藤孝は型とまねることの重要性を以下のように説いている<sup>21</sup>。

型は、達人が吟味して作り上げたものである。したがって、それを反復練習することは、達人の技の本質をまね、盗むことになる。はじめは型の意味がわからなくとも、型が身についてくるプロセスにおいて、その型に込められた意味が徐々に認識されてくる。

様々なスポーツにおいても技術を学ぶ際に先に型をまねさせるところから始める。

型を学ぶことは型にはめることでは決してない。型を学びながら身につけることにより、将来自分らしい型にして表現ができるようにしていくことが重要であると考えます。

## 4. 授業の概要

### 4.1. 第1回「ありがとう!の気持ちが伝わるように」を取り上げた目的

平成17年度から千葉県では小学6年生を対象に「ゆ

題点があることを指摘している。(2分55秒～3分18秒)

○映像3: あさのあつこが健に対して「ありがとうの気持ちが伝わるような」お礼状にするための極意1を伝える。(3分19秒～7分10秒)

○映像4: 極意2から4を伝える。極意2では辞書を使って繰り返される同じ表現を異なる表現に変えていく方法が紹介されている。極意3では手紙の冒頭で季節のあいさつを入れることで自分らしさを出すことが紹介され、健が実際に外に出て、季節を表現する言葉を探す活動を行っている。

(7分11秒～12分39秒)

○映像5: 4つの極意を用いてお礼状を完成させる。(12分40秒～15分00秒)

## (2) 授業前に与えた課題

第1回の本編では、健がサッカークラブの斉藤コーチにお礼状を書いてはみたが内容に納得がいけないことに悩むところから始まるので、子どもたちも同じような状況にすることで学習に入りやすいと思われた。

そこで、本授業を実施する1週間前に教室を訪問し、日頃お世話になっている人に対してお礼状を書いてくるように課題を与えておいた。

## 4.3. 本授業の展開

実施校: 千葉県富里市立根木名小学校

単元名: 「ありがとう!の気持ちを伝えよう」

教科: 総合的な学習の時間

時間: 90分(2時間扱い)

学年: 小学6年生

実施日: 平成21年6月26日(金)

ねらい:

○「ありがとう」の気持ちが相手に伝わるようなお礼状を書くポイントを理解することができる。

## 授業展開

(1) お礼状を書いた感想をたずねる。

1週間前に出したお礼状を書いてくるという課題を確認するとともに、そのときの感想をたずねた。すると、「簡単には書けなかった。」「何を書いたらよいかかわからないが多かった。」「といった反応が返ってきた。「簡単に書けた。」と口にする子どもはいなかった。お礼状を書いた相手は、両親や習い事の先生、コーチが多かった。

(2) 映像1を視聴する。(0分0秒～2分54秒)

根木名小学校の子どもたちがお礼状を書くことに苦労したのと同様に、お礼状を書くのに悩んでいる小学5年

め・仕事びったり体験」という小学生版の職場体験学習を実施しており、富里市の小学校全8校が夏休み中に実施する予定であった。本学習では、単に体験をすることだけでなく、事前に職業について学んだり、事後に体験内容について発表したりするなど事前・事後学習にも重点を置いて行っている<sup>22</sup>。事後学習のプランの中に、受け入れていただいた事業所の方々に対してお礼状を書く学習内容が入っている。子どもたちがお礼状を書くことはそう稀なことではない。しかし、お礼状の書き方についての指導は個別に指導することはあれ、授業として扱って全体に指導することはあまり行われていない。国語や書写の教科書に手紙の書き方が取り上げられているが、それがお礼の手紙であるとは限らない。例えば、田舎の祖父母に出す手紙を扱っている教科書もある<sup>23</sup>。

そこで、「ゆめ・仕事びったり体験」を実施する前に『伝える極意』の中のお礼状をとりあげている第1回「ありがとう!の気持ちが伝わるように」を用いてお礼状の書き方に関する授業プランを作成、実施することとした。

なお、第1回の番組概要は以下のとおりである。

小学5年生の男の子(畠澤健)が、所属するサッカークラブのコーチ(斉藤コーチ)が大学卒業を機に就職するためクラブを離れることになったことから、お礼状を書いてみたものの、うまく「ありがとう」の気持ちを伝わらないのではと自信が持てなかった。そこに、作家あさのあつこが登場し、お礼状の極意を伝えることにより、健が「ありがとう」の気持ちが伝わるようなお礼状を書くことができるまでを描いた番組である。

あさのあつこがアドバイスしたお礼状の4つの極意は以下のとおりである。

○極意1: メモをどんどん書く

○極意2: 辞書は言葉の表現を広げる

○極意3: 自分なりの季節のあいさつ

○極意4: 字は大きく濃く太く

## 4.2. 本授業に向けての準備

### (1) 映像の分割視聴

先にも述べたが、デジタル教材を授業の中で用いる際に問題編の場面と解答編の場面を授業の展開に合わせて分割し、分割した間に思考場面や活動場面を取り入れることが言語能力を身に付けるために重要だと考える。

第1回「ありがとう!の気持ちが伝わるように」は15分間の映像を以下のように5つに分割した。

○映像1: サッカーでお世話になった斉藤コーチが就職のためサッカークラブから離れることになったため健がお礼状を書いたが、「ありがとう」の気持ちが伝わらないのではないかと自信が持てない。(0分0秒～2分54秒)

○映像2: 健のお礼状は「悲しい」「寂しい」といった今の自分の気持ちだけが綴られている等間

生（島澤健）が登場する番組を見ることを予告した。そして、健がどんなことに悩んでいるのかを見つけるように指示し、映像1を視聴した。

(3) 健が自信を持ってないお礼状について検討する。

＜健が最初に書いたお礼状＞

今までありがとうございました。4月から仕事をしはじめてサッカーをなかなかおしえにこられないと聞きました。最初はびっくりしたけど、これからおしえにこられないのは悲しいです。仕事はとてみたいへんだと思うけど、がんばってください。コーチがかわるのはざんねんだけどしかたないと思いました。これからも元気でいてください。

映像1を視聴した後に、改めて健が最初に書いたお礼状を黒板に掲示し、このお礼状でありがとうの気持ちが伝わるかどうか尋ねたところ、「『ざんねんだけどしかたない。』というような表現の仕方はお礼状としてはふさわしくない。」「悲しいとかざんねんという言葉が多く、教えてもらってありがとうという言葉が書かれていない。」「『おしえにこられない』という同じ言葉が繰り返されている。」といった意見が出された。

(4) 映像2を視聴する。

健の書いたお礼状について子どもたちが指摘した問題点が正しいかどうかを意識しながら、映像2を視聴した。

映像2では「同じ言葉を繰り返している。」「健くんの今の気持ちしか書かれていない。」といった子どもたちが出した意見と同様な問題点を指摘していた。

(5) あさのあつこのアドバイス（4つの極意）を検討する。

あさのあつこが問題点のある健のお礼状に対して、アドバイスする4つの極意を予想することにし、グループごとにそれがどのようなものであるか話し合った。どのグループも活発に話し合いが進んだのだが、極意1で指摘しているお礼状の内容に関するものに終始していた。例えば、「ありがとうと思っていることを具体的に書く。」「悲しいとか寂しいとかマイナスになるような言葉を使わない。」といったものである。

そこで、お礼状の内容だけでなく、これ以外にあさのあつこが極意として掲げていることを伝え、別の角度から考えるように指示した。すると、「文字をていねいに書く。」「辞書を引いて漢字を使う。」といったことも意見として出てきた。

(6) 映像3を視聴し、極意1をつかむ。

映像3を視聴し、1つめの極意が「メモをどんどん書く」であることがわかった。「メモをどんどん書く」という行為は子どもたちが指摘した「ありがとうと思っていることを具体的に書く」ためのものである。

「メモをどんどん書く」ところで、斉藤コーチにお世話になったことを思いつがまま書くのではなく、ある1つの型を映像の中では示していた。

それは、図1のように斉藤コーチとサッカーを教えてもらう中で「印象に残った言葉」「それをきっかけに自分が変わったこと」「そのときの気持ち」の3種類を分けてメモに書き出すということであった。

さらに、あさのあつこはこの3種類に分けてメモに書き出すと簡単にお礼の文章ができることも併せて示した。

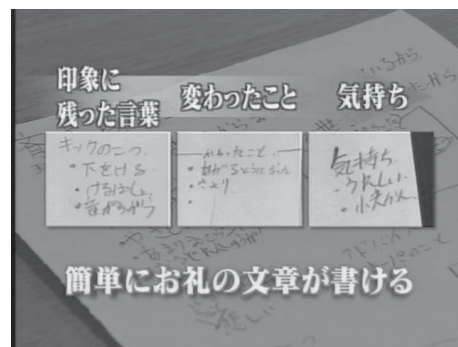


図1：『伝える極意』番組内の映像 24

そこで、筆者は健が書いたメモを3色の付箋紙に置き換えて見せた。「印象に残った言葉」を水色、「それをきっかけに自分が変わったこと」を黄色、「そのときの気持ち」をピンク色の付箋紙にして、健が書いたメモをそれぞれの付箋紙にして示したのである。

そして、この3色の付箋紙を見て、お礼の文章ができるかどうかを子どもたちに書かせてみた。

一人の子どものお礼の文章を紹介する。メモの中の「下をける」（水色）・「上がるようになった」（黄色）・「うれしい」（ピンク色）を用いて、「斉藤コーチがキックが苦手なぼくに『ボールの下をけるんだよ！』と教えてくれた一言でボールが高く上がるようになり、とてもうれしくなりました。」という文章を作成した。

このように、クラスのほぼ全員がお礼の文章を作成することができた。

(7) 極意1を用いて、各自のお礼状を手直しする。

健の3色のメモからお礼の文章を作成したように、各自が事前に作成してきたお礼状も具体的な内容になるように見直すことにした。そのために、各自がお礼状を出す人に対して3色のメモを書き、それを用いてお礼の文章づくりを行った。

＜作成した例＞

パスのフォーム（水色：印象に残ったこと）

パスが強くなった（黄色：自分が変わったこと）

気持ちがいい（ピンク色：そのときの気持ち）

「コーチにはパスのフォームを教えてくださいました。腕の伸ばし方をかえただけでパスが強くなり、カットされる数も減りました。遠くまでパスがとばせたときはとても気持ちがよかったです。」

(8)映像4を視聴し、極意2、3、4をつかむ。

映像4を視聴し、極意2について説明を加えた。あさのは「同じ言葉を何度も使うのはよくない。」と述べており、そのためにどのように辞書を使うかをとらえさせることにした。映像の中では、「教える」という言葉を別の言葉に置き換えるのに国語辞典を使いながら「指導する」という言葉を導き出していた。

本授業の中では、お礼状を書くときによく使うことが予想される「好きになりました」という言葉を取り上げた。「好きになりました」という言葉は辞書には載っていないので「好き」を辞書で引き、そのページをスクリーンに映し出して見せた。「好き」にはいくつか意味があり、その中に「心を引く」「興味を持つ」という言葉があり、それを使って「心が引かれました」「興味を持ちました」という言葉に置き換えることができることをとらえさせた。

(9)映像5を視聴し、学習を振り返る。

第1回の最後の部分である映像5を視聴した。ここでは、健くんが以下に示すような斉藤コーチへのお礼状を完成させたところであるが、この文面を見て、子どもたちは4つの極意を上手に活用するとしっかりとしたお礼状になることをつかんだ。

<健が完成させたお礼状>

梅やパンジーの花がさき始め、春風が感じられる季節になりました。斉藤コーチにキックのこつを教えてくださいました。下をけると上に上がると指導してくれて、でもいがいとむずかしくてやりにくかったです。あと、ける場所がちがうと音もちがうし、足を痛めると言っていました。教えてくださいました。変わりました。ボールが上がるようになったし、距離ものびました。そのときの気持ちはうれしい快感でした。今までありがとうございました。これからは仕事をがんばってください。ぼくもサッカーなどのことをがんばります。

齋藤コーチへ

島澤 健

## 5. 研究の成果と課題

本研究の成果として大きく2つあげられる。

(1)タイムリーに指導することによる有効性

本授業は「ゆめ・仕事びったり体験」という職場体験学習が終わった後のお礼状を書くために行われたものであ

る。以下は、富里市役所で体験した、授業を実施した根木名小6年1組の子どもと実施しなかった6年2組の子どものお礼状である。

夏休みが終わり、少しずつ吹く風もすずしくなってきました。7月の「ゆめ・仕事びったり体験では、いろいろとお世話になり、本当にありがとうございました。

富里市役所のみなさんは私たちの質問にいてねいに答えてくださり、市役所のみなさんが市民のために大変な仕事をしていることがわかりました。

私は仕事の体験として薬をふくろづめをしました。まだその仕事になれていなかったのできんちょうしましたが、みなさんがいてねいに教えてくださいましたおかげで何とか上げることができました。

短い時間でしたが、とてもいい経験になりました。これからもよろしくお願いします。

根木名小6年1組 ○○ ○○

この前はぼくたちのために時間をとって体験させていただきありがとうございました。

市役所にはいろいろな課があり、納税課では税金について、子育て支援課では子育ての相談していることについてよくわかりました。

それに、市役所の仕事も体験させていただきました。

市役所では大変な仕事をたくさんしていることがわかりました。前以上に市役所に興味を持ちました。

根木名小6年2組 ○○ ○○

両方の文面を比較すると、前者は季節のあいさつに始まり、具体的な表現が多い。文字もいてねいであった。辞書を使ったかどうかは定かではないが、後者との文面を比較すると、極意を活かしている様子が随所にうかがえる。お礼状を書くという言語活動に対して、必要な時期に必要とする言語能力を育成する授業の有効性があると考えられる。

職場体験をする3週間前に本授業を実施したが、お礼状を書いたのは夏休み明けの9月であった。今回は、お礼状の中に職場体験した内容が具体的に書けるようになることを意図して、職場体験よりも前に本授業を行うこととした。お礼状を書く直前で行う方がさらによりよく書けるのか、それとも今回のように体験する前に授業実施の方がよいのかは今後の検討課題である。

(2)極意を型として示し、練習する活動を取り入れる有効性

本授業では、お礼状の極意である「メモをどんどん書く」を、3色の付箋紙にメモを内容ごとに分けて書き、そこから文章を作成するという型を示した。そして、その型をもとに文章作成の練習を取り入れた。

健の作ったメモで文章作成する練習を行ったところ6年1組28名全員が文法的にも内容としても正しく文章を書くことができた。メモをつくることができればお礼の文

章を作成することができるということが子どもたちに自覚できたようである。

型を示した本授業について、ある子どもは以下のように感想を書いている。

ぼくは、何十回もお礼の手紙を書いてきたけど今回の授業はととてもためになりました。(中略) この学習をしたので今度お礼の手紙を書くときは困らないでいいなあと思いました。

今回初めてお礼の手紙の書き方を教わることができて今後の自信につながったようである。

さて、この後自分のお礼状を手直しする際に、3色の付箋紙にメモを書き文章を作成したが、90%以上の子どもが自力で修正して書き上げることができた。

ただ、メモをつくることについては苦戦している子どもたちも少なからずいた。一人一人が異なる人間にお礼状を書く授業の場合、指導者がお礼を書く内容やその背景について把握しておくことが難しいので、校外学習や社会科見学など共通する体験をもとにお礼状を書くことができるならばメモの作り方についてもきめ細やかな指導が可能になると考える。

また、メモを内容ごとに3色の付箋紙に分けて書き、文章を作成する方法は、作文や読書感想文などにも応用できるものと考えられる。

年代に林氏が千葉県船橋学園女子高校(現・東葉高等学校)で提唱した。

<sup>11</sup> 『ひろがる言葉 小学国語教科書』(教育出版 小5上・下、小6上・下)で取り上げられている言語活動である。

<sup>12</sup> 平成19年度全国学力・学習状況調査分析報告書(富里市)、千葉県富里市教育委員会

<sup>13</sup> 『ひろがる言葉 小学国語教科書 5下』、教育出版、P7～24

<sup>14</sup> 『ひろがる言葉 小学国語 教師用指導書 研究編 5下』、教育出版、P26～27

<sup>15</sup> 千葉県富里市立富里南小学校の平成18年度国語科授業実践のなかで課題とされていた。

<sup>16</sup> 東京都台東区立上野小学校の平成19年度研究内容については、以下のHPを参照。

<http://www.taitocity.net/ueno-es/>

<sup>17</sup> 平成22年2月現在、平成20年度にNHK教育で放送された「伝える極意」が再放送されている。

<sup>18</sup> NHK「伝える極意」NHKデジタル教材HPは以下参照。

<http://www.nhk.or.jp/gokui/ja/frame.html>

<sup>19</sup> 「小学校学習指導要領解説 国語編」(平成20年8月)では、「読むこと・聞くこと」「書くこと」「話すこと」の領域において、言語活動例が示されている。

<sup>20</sup> NHK学校放送・デジタル教材パンフレット「教育テレビ&ICT活用で授業力アップ」、2009、P30

<sup>21</sup> 齋藤孝、2001、子どもに伝えたい<三つの力>、P116

<sup>22</sup> 富里市教育委員会では、各小学校に「ゆめ・仕事びったり体験」に関する指導資料を配付し、事前・事後学習を行うように指導している。

<sup>23</sup> 根木名小学校が使用している教科書『ひろがる言葉 小学国語』では、祖父母への手紙の書き方が取り上げられている。

<sup>24</sup> 本映像は、NHK「伝える極意」NHKデジタル教材HP内の以下のアドレスにある。

<http://www.nhk.or.jp/gokui/ja/01arasuji.html>

<sup>1</sup> PISA(OECD生徒の学習到達度調査)2003年調査  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/04120101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04120101.htm)  
2006年度のPISA調査における日本の順位は以下の通りである。

- ・読解力(57ヶ国中15位)
- ・数学的リテラシー(57ヶ国中10位)

<sup>2</sup> 国立教育政策研究所編『生きるための知識と技能<2> OECD生徒の学習到達度調査(PISA)2003年調査国際結果報告書』ぎょうせい、2004年、iページ

<sup>3</sup> 従来測ろうとしていた学力とは学んだ知識や技能がどれだけ身についたかというもの。

<sup>4</sup> このことは、平成16年度臨時全国都道府県・指定都市教育委員会指導主事会議において、中山成彬文部科学大臣(当時)が学力向上の具体的な戦略の一つとして述べている。

詳しくは、以下HPを参照。

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05020801.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05020801.htm)

<sup>5</sup> 読解力向上プログラム、文部科学省、平成17年12月

<sup>6</sup> 平成20年度千葉県標準学力検査(国語)、財団法人千葉県教育会館文化事業部、平成21年2月実施

<sup>7</sup> 平成19年度全国学力・学習状況調査(国語科)、文部科学省、平成19年4月22日実施

<sup>8</sup> 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』(2008年1月17日)、中央教育審議会答申、P14

<sup>9</sup> 『小学校学習指導要領解説 総則編』、平成20年8月、P53

<sup>10</sup> 主に学校教育において、読書を習慣づけ、活字離れを食い止めるためにおこなわれている教育活動である。1988